
真夜中の闖入者

ヒジャイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の闖入者

【Nコード】

N2400G

【作者名】

ヒジャイ

【あらすじ】

初老のコンビニ深夜パート。午前三時、商品を棚に入れている作業をしている時、奇妙な男が入ってきた。知的障害者であるその男をどのようにすればいいのか。初老の男は四苦八苦する。

真夜中のコンビニエンスに奇妙な男が入ってきた。

午前三時に奇妙な少年がやって来た

私はコンビニエンスの深夜パートをやっている初老の男です。

午前0時から午前八時までが私のパートの時間帯です。人々が寝ている時間に仕事をやり、人々が仕事を始める頃に私はパートの仕事を終え、アパートに帰って就寝するのです。こうもりのような生活をするようになって二年が過ぎました。

深夜は客が少ない。多くの人は夜に寝るのですから深夜に客が少ないのは当たり前

前のことです。しかし、深夜に客が少ないから深夜のパートは暇でのんびりと仕事をしているのかといえばそうではありません。深夜パートもそれなりの仕事があり、それなりにハードなのです。

深夜は道路を走る車が少ないです。ですから、スムーズに自動車は走れます。コンビニエンスに商品を配達する配送車は渋滞のない深夜に走れば定刻通りに配達ができます。ですからコンビニエンスのほとんどの商品は深夜に運ばれて来るのです。深夜パートの仕事の中心は客の応対よりも商品を陳列棚に並べることです。

私が働いているコンビニエンスの深夜パートは私一人です。深夜パートが二人なら仕事は楽なのですが、私一人で買い物に来た客の応対をしながら山のような商品を陳列棚に並べていくのです。仕事はけっこうハードなのです。

午前一、二時の頃はちよくちよく客が入って来ます。しかし、午前三時頃になるとぱったりと客は途絶えます。客がいないのは私にとって都合がいいことです。客が一人も居ない時が商品を陳列棚に集中的に並べるチャンスなのです。

あの夜も、BGMだけが聞こえる午前三時の誰も居ないコンビニエンスで、私はいつものように黙々と商品を陳列棚に並べていました。ポテトチップスの大袋を一番下の陳列棚に並べている時、

キンコンコン。

とドアのチャイムが鳴りました。私は、

「いらっしやいませ。」

と言い、急いでポテトチップスを棚に入れてから立ち上がり、ドアの方を見ました。

客がドアからレジカウンターに向かっている時はタバコを買う客です。その時は私は急いでレジカウンターの方に行きます。そして、カウンター内にあるタバコを客に売ります。客が壁際の雑誌コーナーに歩いて行けば、雑誌の立ち読みをする客ですから、私は客が雑誌の立ち読みするのを見届けると、再び商品を陳列棚に並べる作業を続けます。雑誌コーナーの奥にトイレがあります。雑誌の立ち読みをしないでトイレに直行する客もいます、ソフトドリンクコーナーに行く客。インスタント食品のコーナーに行く客、ファースフードコーナーに急ぎ足で行く客、牛乳、健康飲料コーナーに行く客と、コンビニエンスに入って来る客の動きは色々です。私は客の動きを見ながら、商品を陳列棚に並べます。そして、客がレジカウンターに向かって歩いているのを見ると急いでレジカウンターの方へ走って行き、客を迎えるのです。

商品を陳列棚に並べるのに夢中になって、客がレジカウンターにやって来ても気づかない時は客に怒られます。しかし、客を意識し過ぎてレジカウンターに張り付いていては、商品を陳列棚に並べる作業が疎かになります。客が店内に居る時の深夜パートは客の動きを見ながら商品を陳列棚に並べるのです。

深夜パートは山のような商品を陳列棚に並べながら客の動きに気を

配らなければならない、けっこう神経を使う仕事なのです。

ドアのチャ임が鳴ったので、私はコンビニエンスに入ってくる客がどのコーナーに行くのかを見定めるためにドアの方を見ました。ドアには少年が立っていました。

午前三時の深夜にコンビニエンスに来る少年は滅多にいません。私は不思議に思いながら少年を見ていました。

少年はドアに立ったまま店内をじろじろと見回しています。ドアで立ち止まる客というのはほとんどいません。コンビニエンスに入ってくる客は、お菓子、ソフトドリンク、ファーストフード、タバコなど、自分が買いたい商品はコンビニエンスに入る前に決めているのが普通です。ですから、コンビニエンスに入ってきた客は自分が買いたい商品を陳列しているコーナーに向かってさっさと歩いていきます。しかし、少年は他の客のようにすぐには店に入って来ません。私は、店の中に入って来ない少年を妙に思いながら、少年がどこに向かって歩き出すのかを見定めるために少年が店に入るのを待っていました。

少年は寝巻きの上に縞模様のちゃんちゃんこを着けていました。冬ですからちゃんちゃんこをつけてコンビニエンスに来るのは珍しくないのですが、しかし、少年の姿は何か変です。私は少年を注意深く見ました。

少年のちゃんちゃんこが大きく左側にずれています。少年はちゃんちゃんこがずれているの知らない風で、ちゃんちゃんこを直そうとしません。ちゃんちゃんこが大きくずれば普通の人間なら無意識に直します。しかし、ドアに立っている少年はちゃんちゃんこのずれを直しません。なんだか妙な感じです。それに少年の顔の様子もおかしい。顔は斜め気味であり、横を見たり下を見たりしていますが店の中を観察しているというより無意味に顔を動かしているようです。少年の顔の動きは普通の人間の動きに比べてぎこちない感じがします。

私は少年に異様なものを感じました。

少年が店内に入って来ました。よっぱらいのようにたたとふらついた足取りです。少年はあぶつなかしい足取りで店内を歩き回り始めました。酒を飲んでいるのだろうか。私は少年の動きから目を離せなくなりました。

少年はラーメンを食い入るように見たかと思うと缶詰のコーナーに行つて缶詰を食い入るように見てから、化粧品コーナー、洗剤コーナーでも同じことをしました。お菓子コーナーに来て、少年はお菓子を取つてしげしげと見つめています。

私は少年の足を見て驚きました。少年はなんと裸足なのです。少年はぺたぺたと裸足で店内を歩き回つていたのです。深夜に裸足でコンビニエンスに入つて来たということは、少年は家からコンビニエンスまで裸足で歩いてきたということです。今の時代に裸足で道を歩くのは考えられないことです。しかも夜の道です。

少年の服装のバランスは崩れているし、顔の表情もおかしい、そして裸足で歩いています。普通ではありません。奇妙な少年です。

私はお菓子を物色している少年に近づいて、

「いらつしゃいませ。なにを探しているのかな。」

と声をかけました。しかし、少年は私の声に反応を示しませんでした。少年は私を無視したのです。

私は少年に、

「もしもし。」

と言いました。まるで私の声が聞こえないかのように少年は私の声に反応しません。耳が聞こえないのだろうか。どうも、そうではないような気がします。

・・・この少年は普通の人間ではない。・・・無反応な少年に私は気味悪さを感じました。私は恐る恐る少年の肩を軽く叩いて、
「もしもし。」

と言いました。しかし、少年は反応しません。肩を叩いても反応し

ないということは、私の声に反応しなかったのは耳が聞こえない性ではなかったようです。

呼びかけても肩を叩いても少年は反応しません。不気味です。できるならこんな気味の悪い少年には関わりたくありません。それが素直な私の気持ちでした。しかし、私はこのコンビニエンスの深夜パートです。コンビニエンスに入って来た奇妙な少年をそのまま放置するわけにはいきません。

肩を叩いても反応がないのなら肩をゆするしかありません。しかし、肩を掴んだ瞬間に少年が暴れないだろうか。私は少年の肩を掴むのに不気味な恐さがありました。もしかすると私が少年の肩を掴んだ瞬間に、少年がゾンビのような顔になって私の手に噛み付くかもしれないというイメージが私の脳裏に浮かんでいました。そんな恐怖を持ちながら私は恐る恐る少年の肩を掴んだのです。少年は反応しませんでした。私は少年の肩をゆすりました。そして、

「もしもし。」

と呼びかけました。しかし、少年は反応しません。私はもう一度少年の肩をゆすりました。

「もしもし。」

しかし、少年は反応しません。私は無反応な少年に困りました。少年を探している親がやって来ないかと期待しながら私はドアの方を見ました。しかし、チャイムは鳴らないしドアも開きません。私は少年を探している親がドアから入って来るのをあきらめて、ドアから少年に目を移しました。少年はポテトチップスの袋を開けようとしています。私は慌てて少年の手首を掴みました。

「袋を開けたら駄目だよ。」

と私は少年を叱りました。すると少年は、

「うっ、うっ。」

と喉の奥から這い出るような気味の悪い声を発しました。私は思わず気味の悪い声に怯んで少年から手を離しました。

少年は、「うっ、うっ、うっ。」とうなりました。少年は話すことができ

ないのだろうか。そんなことはないだろうと思いながら私は再び少年の肩をつかんで肩を揺らしながら、

「もしもし。」

と言い、

「私の言葉が分かるか。」

と言いながら少年の顔を見ました。少年の顔は無表情で私の問いに反応しませんでした。・・・少年は言葉が分からないかもしれない・・・もし、言葉が分からないのなら、店内をうろろしないように注意しても少年は聞き入れそうにありません。

「家はどこなのか。」

本当に少年が言葉を分らないか、それを確かめるために私は質問をしました。しかし、少年は返事をしませんでした。

「家の電話番号を教えてくださいませんか。」

と言いながら少年の顔の表情が変化するかどうかを見ました。少年の顔は変化しませんでした。少年から電話番号を聞くことができれば少年の親に連絡することができ残念ながらそれはできそうもありません。私は困りました。とにかく、少年をなんとかしないと商品を陳列棚に入れる仕事をするできません。

午前三時過ぎ。深夜。客とは言えない少年が一人。途方にくれる深夜パートの初老の男が一人。

少年の「うう、うう。」とうなる声を聞いて私は首を傾げました。少年にしては声が太いのです。その声は少年の声ではない気がしました。少年と想っていたのは私の勘違いかもしれません。私は少年の顔をじっくりと見ました。よく見ると少年の顔ではありません。頬はこけて、顎は張り、顎ひげも生え、膚は乾いている。眉毛は異様に太く濃い。一見少年のように見えた真夜中の闖入者は近くでよく見ると二十歳を超えているのではないかと思える顔です。私はますます少年いや真夜中の闖入者に異様な恐さを感じました。

どうすればいいのだ（前書き）

気味悪い男が真夜中のコンビニで

どうすればいいのだ

どうすればいいのだ

午前三時過ぎ。ゾンビのような気味の悪い闖入者。少年と想像していたが少年ではなかった真夜中の闖入者。私の存在を無視している真夜中の闖入者。裸足の真夜中の闖入者。

私はどうすればいいのだ。

私は真夜中の闖入者をどうすればいいか分かりませんでした。

私が思案に暮れながら立っていると、真夜中の闖入者は陳列棚に手を伸ばして再びポテトチップスを掴みました。私はポテトチップスを彼の手から取るのを迷いました。彼が少年ではないということを知ったので私の彼に対する恐怖は増していたのです。さつきはポテトチップスを取るのにうまくいきましたが、今度もうまくいくとは限りません。しかし、そのままにすれば、彼はポテトチップスを開けてしまうだろう。

私はポテトチップスを彼の手から取らなければなりません。しかし、得たいの知れない真夜中の闖入者の体に触れるのは言い知れぬ恐さがあります。それに急に暴れないか不安です。しかし、私はこのコンビニエンスの深夜パートです。私は真夜中の闖入者からポテトチップスを取り戻さなければなりません。

私は恐る恐るポテトチップスを掴んでいる真夜中の闖入者の手を掴みました。手を掴んだ瞬間に彼が暴れるのではないだろうかとびくびくしていましたが幸いにも私の悪い予想ははずれました。真夜中の闖入者は暴れることも私の手を強引に振り解くこともしないでポテトチップスを掴んだまま動きを止めました。暴れはしませんが、ポテトチップスも離しません。私は真夜中の闖入者の顔を見ました。相変わらず無表情な顔です。しかし、突然凶暴になつて暴れ出すかも知れない顔に私には見えました。その恐怖があるために、真夜中

の闖入者の手を掴んでいる私も簡単には動けませんでした。
動かない真夜中の闖入者。

動けない私。

気味の悪い沈黙の時間が過ぎていきます。

BGMは夏川リミの涙そうそうの歌が切々と流れています。

コンビニエンスの店内は明るい。

しかし、白い光は気味の悪い沈黙を緩和させることはできません。

むしろ、静かな白い空間は不気味さを増しています。

私はじっとしているわけにはいきません。私には深夜パートの仕事があるのです。私は意を強くして、恐る恐るポテトチップスの袋を掴んでゆつくりと引つ張りました。しかし、私にポテトチップスを取られまいと真夜中の闖入者はポテトチップスを強く握っています。真夜中の闖入者は、「うう。」と喉の奥から気味の悪い唸り声を出しました。唸り声は怒りの声にも似ています。私は恐くなりポテトチップスから手を離しました。

真夜中の闖入者は怒って暴れ出すかもしれませんが。私は不安になりました。しかし、私の不安を無視するように真夜中の闖入者はじつと動かずにいます。私は再びポテトチップスを真夜中の闖入者の手から取り戻すのを試みました。ゆつくりゆつくり。そうつと。真夜中の闖入者の顔を窺いながら。私はポテトチップスを引つ張りました。今度は不思議なことに真夜中の闖入者は抵抗しないでポテトチップスを手から離しました。

私はほっとしました。

私は真夜中の闖入者を掴んでいる手を離しました。すると真夜中の闖入者は私から離れて歩いて行きます。そして、別の棚に行き、ビスケットの箱を掴みました。私は急いで真夜中の闖入者のところに行き、彼の腕を掴んでビスケットの箱を真夜中の闖入者の手から離しました。すると、真夜中の闖入者は私の手を振り切って私から離れて、別の棚にあるお菓子を掴もうとしました。私は走って行って真夜中の闖入者からお菓子を取りました。

困りました。これでは真夜中の闖入者と永遠に鬼ごっこです。鬼ごっこをしないためにはずっと真夜中の闖入者を掴まえていなければなりません。真夜中の闖入者がコンビニエンスに居る間は私は私の仕事ができません。

どうすればいいのだろう。

私はお菓子を掴もうとしている真夜中の闖入者の腕を掴んで、お菓子コーナーから離れさせようと思いました。しかし、真夜中の闖入者は唸り声を発しながら抵抗してお菓子コーナーから離れようとしません。

「ねえ、君。お金を持っているのかな。お金を持っていないとお菓子は買えないよ。ここのお菓子は売り物だからね。君はお金は持っているのかな。」

私は説明しても無駄だと知りながら、お金がないとお菓子は食べられないことをやさしい声で説明しました。

幼稚園生でもわかる理屈ですが、予想通り私の親切で穏やかな説明でも真夜中の闖入者はなんの反応も示しません。無駄だと分かっているにもかかわらず私の声は明るい店内に空しく響き、真夜中の闖入者は私の説得を無視して背をかめてお菓子を物色し、気に入ったお菓子を抱え込もうとします。

私は、

「駄目だよ。お金がなければ買えないよ。」

と言い、

「お母さんと一緒に買い物に来なさい。」

と諭し、

「ここにあるのは売り物だからね。」

「君はお金を持っているのか。おじさんにお金を見せて。」

と私は思いつくままに話しながら真夜中の闖入者からお菓子を取り返しては元の場所に戻しました。その行為が何度も繰り返されます。

・・・真夜中の闖入者は知的障害者に違いない。・・・私はそう確

信しました。

彼の名前を知らないから真夜中の闖入者と呼ぶしかありません。言葉を知らない知的障害者である真夜中の闖入者にどのように対応すればいいのか私には見当が付きません。外に追い出してもすぐに中に入ってくると思います。

コンビニ強盗に対してのマニュアルでは強盗には抵抗しないでさつさとレジの金をあげるように教えています。しかし、真夜中の闖入者のような知的障害者にはどのように対応すればいいのか深夜パートマニュアルにはありません。

深夜に言葉を知らない知的障害者が入ってくるとは、深夜パートのマニュアルを作った人間は想像しなかっただろう。私もこんな事態が起こるとは全然予想していませんでした。私はどうすればいいのだろう。私は途方にくれました。

タクシーの運転手がやって来た

真夜中の闖入者が入ってきて数十分程が過ぎた頃、キーンコーンという音が店内に響きました。キーンコーンは客が入って来た合図です。私は真夜中の闖入者の親が入って来たのを期待しました。

「いらつしゃいませ。」

と言いながら、私はドアの方を見ました。入って来たのは真夜中の闖入者の親らしい人物ではありませんでした。私はがっかりです。白髪まじりの五分刈り頭の男はコンビニエンスに入るとカウンターに向かって歩いています。まっすぐカウンターに向かう客はタバコを買う客です。私は真夜中の闖入者から離れて小走りでカウンター内に行き、タバコの陳列ケースの前に立ちました。ドアの外を見るとドアの近くにヘッドライトが光を放っているタクシーが止まっています。五分刈りの男はタクシーの運転手のようです。

「スーパーライトをくれ。」

スーパーライトとはマイルドセブンのスーパーライトのことです。

私はマイルドセブンのスーパーライトを棚から取り客に渡しました。客は千円札を出しました。私は七百円のつり銭を渡しながら、

「あの子を知りませんか。」

と言つて、お菓子コーナーでお菓子を物色している真夜中の闖入者を指しました。五分刈りの男は後ろを振り返り、真夜中の闖入者をちらつと見て、

「知らないなあ。」

と言いました。

「知的障害者のようなんだが。」

と私が言つと、五分刈りの男は全然興味を示さないで、

「どこかの病院から逃げてきたんじゃないのか。」

こともなげにそう言つと、さつさと出て行つてしまいました。

五分刈りの男にとってコンビニエンスの出来事は関係のないことなのです。彼には彼の仕事があります。迷い込んで来た知的障害者の問題でコンビニエンスの店員が困っているからといって手助けする気は彼には起こりません。それより、運転代行というタクシーの運転手にとって強力な商売敵が登場したためにタクシーの稼ぎが厳しくなっています。彼は生活のために水揚げを少しでも上げなくてはならないのです。コンビニエンスで油を売っている暇なんてタクシーの運転手にはないのです。

だから五分刈りの男は、

「どこかの病院から逃げてきたんじゃないの。」

と軽くセリフを吐くと真夜中の闖入者の顔を見ようともしないですーパーライトの箱をコンコンと叩きながらタクシーに戻って行きました。五分刈りの男がコンビニエンスのドアから出て行った途端に私はお菓子コーナーの方に走って行きました。

途方にくれる

真夜中の闖入者はかっぱえびさんとウエハーチョコレートとわさびーふの袋を小脇に抱えていました。私は走って行って真夜中の闖入者が抱えているお菓子を取ろうとしました。私がお菓子の袋を取ろうとすると真夜中の闖入者は、「うう、うう。」と唸って後ずさりをしました。さっきの反応とは違い真夜中の闖入者はお菓子を抱えて抵抗したのです。

私は真夜中の闖入者の抵抗に戸惑いました。強引にお菓子を取ろうとしたら暴れ出すかも知れません。しかし、真夜中の闖入者が暴れ出す可能性があってもそのまま真夜中の闖入者にお菓子を持たせておくわけにはいきません。真夜中の闖入者はお菓子の袋を開けるかも知れないし、お菓子を抱えてコンビニエンスから出ていく可能性もあります。私は真夜中の闖入者のお菓子を取り戻さなくてはならないのです。

私は真夜中の闖入者の脇に腕を差し込みお菓子を押し上げました。私は真夜中の闖入者が抵抗するものと覚悟していたので力を込めて押し上げました。ところが真夜中の闖入者は予想に反して脇を締めていませんでした。私の腕は真夜中の闖入者が抱えているお菓子を突き出してしまい、お菓子は空中に舞ってから床に落ちました。私は散らばったお菓子を拾い集めてお菓子の陳列棚に戻しました。私が散らばったお菓子を陳列棚に戻している間に真夜中の闖入者は別の陳列棚からビスケットの箱とちぎりいかの袋を取り脇に抱えました。私は脇に抱えているお菓子を取ろうとしました。すると真夜中の闖入者は「うう。」と唸りながら座り込んで身を伏せ、お菓子を取られまいとしました。

最初は掴んでいたお菓子を抵抗しないで離しました。次は後ずさりして脇に抱えているお菓子を取られまいとしました。そして今度は座り込んで私の腕を脇に入れられないようにしています。真夜中の闖入者は真夜中の闖入者なりに知恵を働かして手に入れたお菓子を守ろうとしています。

私は座り込んでいる真夜中の闖入者の脇に腕をねじ入れようとしま

したが真夜中の闖入者はきつく脇を絞めて私の腕の侵入を防ぎました。私はお菓子を取り上げることをあきらめざるを得ませんでした。しかし、真夜中の闖入者を、お菓子を抱えたままにしておくわけにはいきません。私は困りました。どうすればいいのだろう。

私は真夜中の闖入者を事務所に連れて行って、椅子に縛りたい衝動にかられました。店内から真夜中の闖入者を排除したいのが私の正直な気持ちです。私は送られてきた山のような商品を陳列棚に並べる作業をしなければならぬし、お客が来たらレジに立たなければなりません。真夜中の闖入者をそのまま放置しておくとは彼は店内をうろつき回りあちらこちらの商品を散らかしてしまうに違いありません。それをさせないためには真夜中の闖入者を事務所の椅子に縛り付けた方が一番いい方法です。しかし、それは真夜中の闖入者への虐待行為になります。実行するわけにはいきません。

私は真夜中の闖入者を紐で縛りたい気持ちを押さえながら、真夜中の闖入者の襟と腰を掴んで持ち上げました。すると今度はなんの抵抗もしないで真夜中の闖入者はすっと立ち上がりました。私は簡単に真夜中の闖入者が立ったので拍子抜けしました。もしかしたら抱えているお菓子も簡単に取れるかもしれないと思って私は真夜中の闖入者が抱えているお菓子に手を掛けました。すると真夜中の闖入者は「うう。」と唸りながら座ろうとしました。私がお菓子から手を離すと真夜中の闖入者は座り込もうとする行為を止めました。

強引にお菓子を取り上げた時、真夜中の闖入者はどんな行動をするのだろうか。暴れ出すのか暴れ出さないのか。私は予想することができません。私は真夜中の闖入者の腰を掴んだまま途方にくれました。

私は真夜中の闖入者を掴んだままでは仕事ができません。真夜中の闖入者を掴んでいる手を離して真夜中の闖入者を自由にしてみえれば真夜中の闖入者は陳列棚の商品を荒らした拳句にお菓子を抱えて外に逃げ出してしまうだろう。真夜中の闖入者の問題を解決しないと私は仕事ができせん。私は途方にくれました。

途方にくれた私は真夜中の闖入者を連れてコンビニエンスの外に出ました。家から逃げ出した真夜中の闖入者を探し回っているはずの親を見つけるためです。私は通りの視界の届く限りを見回しました。真夜中の闖入者は裸足だから真夜中の闖入者の家はコンビニエンスからそれ程遠くない所にあるかも知れないという期待がありました。二車線の道路沿いには寂れたスナックのネオンがポツンポツンと輝き、閉店した居酒屋やおでん屋のネオンも輝いています。五十メートル先にはガソリンスタンドのネオン。百メートル先にはファミリ―レストランのネオン。それらのネオンの周りだけが小さな明かりのたまりを作っています。視界が届く数百メートル先の外灯の光。車のヘッドライトの光。それらの光の中に人影らしきものがないか見回しましたが人間の影はひとつも見当たりませんでした。近づいてくる車がコンビニエンスの駐車場に止まって真夜中の闖入者を連れていくことを期待しましたが、車はそっけもなく素通りしていくだけです。

闖入者がお菓子を抱えて逃げ出した

真夜中の闖入者が逃げる

どうすれはいいだろう。真夜中の闖入者がいる限り私は仕事ができません。時間が無駄に過ぎていきます。私は真夜中の闖入者を探し回っている親の車がやってくることを期待して、新たに近づいてくる車のヘッドライトの光を探しました。しかし、ヘッドライトの光は見当たりません。

突然、真夜中の闖入者が私の腕を振り切って逃げ出しました。真夜中の闖入者がおとなしくしていたので彼を掴んでいる私の手が緩んでいたのです。

すたすたと逃げていく真夜中の闖入者。私はあわてて追いかけました。

コンビニエンスの駐車場を離れると闇が広がっています。道路沿いはところどころにネオンが点いていて明るい場所も見えますが、コンビニエンスの北側は閑静な住宅地になっていて夜は闇の世界です。真夜中の闖入者は北側の閑静な住宅街の闇の方に逃げました。

真夜中の闖入者はすたすたと逃げました。しかし、真夜中の闖入者の走りは遅い。真夜中の闖入者はただすたと競歩のような小走りをしているだけでした。私は難なく真夜中の闖入者に追いつくと真夜中の闖入者が着ているちゃんちゃんこの襟を掴みました。真夜中の闖入者は小脇に抱えているお菓子を私に取られまいと両腕でお菓子を抱えてうずくまりました。襟を引っ張って起き上がらせようとしたが真夜中の闖入者は体をこわばらせて動きません。ちゃんちゃんこの襟を強く引っばるとちゃんちゃんこが破れてしまうかも知れないので私はこれ以上強く引っばるのはあきらめました。しかし、真夜中の闖入者をコンビニエンスに連れ戻すことをあきらめるわけにはいきません。真夜中の闖入者が抱えているお菓子を取

り上げてしまえば真夜中の闖入者を放してやってもいいですが、真夜中の闖入者がお菓子を抱えている間は解放するわけにはいきません。強引に取ろうとすればお菓子の袋が破けてしまう恐れがあります。それに真夜中の闖入者が暴れ出す恐れもありますから強引にお菓子を取り上げることができません。

真夜中の闖入者が抱えているお菓子はせいぜい四、五百円の値段です。寛大な心の深夜パートならお菓子を持たせたまま真夜中の闖入者を逃がしたかも知れません。煩わしいことが嫌いな面倒臭がり屋の深夜パートも真夜中の闖入者を逃がしたと思います。しかし、私は小心者で社会規律を守ることが体に染み込んでいる五十五歳の初老の男です。私は真夜中の闖入者がコンビニエンスの商品を万引きするのを許すことはできませんでした。それを許すと私も泥棒になった気がするのです。真夜中の闖入者が抱えているお菓子はコンビニエンスのお菓子だからコンビニエンスのお菓子コーナーの陳列棚に戻さなければならないという考えしかその時の私にはありませんでした。

たった数百円のお菓子なのだから被害は小さいし、真夜中の闖入者がお菓子を盗んだことを誰にも言わなければなんの問題にもなりません。私の被害があるのでもないし、店の損失も極くわずかです。そのまま真夜中の闖入者を放した方がずっと私は楽でした。しかし、私には不正行為を見逃すことへの罪悪感と、不正行為を黙認したことが他人にばれるかもしれないという恐怖があり、お菓子を持つている真夜中の闖入者を逃がすという気にはなれなかったのです。なぜあの時、真夜中の闖入者を逃がしてあげるといふ機転が私にはなかったのだろうか。つくづく私の小心さと機転のなさにあきれるばかりです。私は小心者で機転を効かす能力のない哀れな初老の男なのです。

私は真夜中の闖入者を店に連れて行くために真夜中の闖入者の背後

に回り、両脇を抱えて強引に立たそうとしました。すると真夜中の
闖入者はますます背を丸めて「うう、うう。」と唸りながら抵抗し
ました。「うう、うう。」という声を耳元で聞くのは不気味なもの
があります。私は気味悪くなり両手を離しました。

私は途方にくれました。しかし、途方にくれたからといって新たな
解決法を模索して時間を無駄にすることはできません。店の深夜パ
ートは私ひとりしか居ないのです。コンビニエンスを無人のままに
しておくわけにはいきません。私は一刻も早くコンビニエンスに戻
らなければならぬのです。

私は最後の手段として抵抗する真夜中の闖入者を強引に引きずって
いくことにしました。でもうまくいくだろうか。闖入者は必死に抵
抗して暴れ出すかも知れません。それに知的障害者である彼を強引
に引きずっていくことには迷いが

もありました。彼を引きずっていくのは哀れな者をそれ以上に哀れ
な存在にになってしまう気がしました。しかし、私は善意の人間でも
なければボランティア精神を持っている人間でもありません。ただ
のコンビニエンスの深夜パートです。深夜パートの収入で生活をし
ている初老の男です。不況の煽りで会社を合理化された私。やつと
のことで見つけたコンビニエンスの深夜パート。不祥事を起こして
深夜パートを首にされたら私は非常に困ります。善意やボランティ
アの精神を持つ余裕は私にはありません。

コンビニエンスの深夜パートは私ひとりです。もし、お客が来たら
私はお菓子を抱えた真夜中の闖入者をそのままにして急いでコンビ
ニエンスに戻らなければなりません。そうすると真夜中の闖入者は
逃げてしまいます。

私はお菓子を抱えて抵抗している真夜中の闖入者が憎くなりました。
幼児のように体が小さいのなんなく持ち上げてコンビニエンス
に戻るができます。もし、真夜中の闖入者がせめて少年くらい
の知能を持っているなら説得してお菓子をとり戻すことができます。
真夜中の闖入者は体は大きいから幼児のように抱えることはできな

いし、言葉を理解できないくらいに幼児のように知能が低いから説得もできません。体が大きくて知能は幼児なみの真夜中の闖入者はとてもやつかしい存在です。

しかし、とにかくにも真夜中の闖入者を引きずって強引にコンビニエンスに連れて戻るしか私には方法はないのです。暴れて抵抗するなら腕を締め上げよう。腹にパンチを食らわすのも遠慮しないでおこう。知的障害者への虐待と思わば思え。私は私の生活を守る権利がある。・・・しかし、実行は誰も見ていない内にやらなければならぬ。知的障害者への虐待と思われたら大変だ。・・・

決心をした私は辺りを見回して誰も居ないことを確かめてから、真夜中の闖入者の右脇に強引に腕を入れると、

「さあ、あっちへ行こう。」

とやさしい声を掛けながらしかし強引に彼を立たせました。私は真夜中の闖入者が抵抗するものと覚悟していました。抵抗したらこっちもあらん限りの力で彼を引きずってコンビニエンスに連れていく覚悟でいました。ところが私が引き上げた瞬間は少し抵抗する素振りを見せましたがすぐに私の腕は軽くなりました。頑固にうづくまっていた真夜中の闖入者は私の予想に反しておとなしく立ちあがったのです。彼の心変わりに驚かされましたが、どうやら最悪の事態は免れそうです。腕を掴んで強引に引く張ると真夜中の闖入者は抵抗することもなく私に引く張られました。私は急いで真夜中の闖入者をコンビニエンスの中に連れていきました。

コンビニエンスの中に入った真夜中の闖入者は外に出て行こうとしてもがきました。私は真夜中の闖入者が逃げようとしても絶対に逃がさないように力は強めました。すると真夜中の闖入者はほんの少しの間もがいてすぐにおとなしくなりました。

「さあ、お菓子をここに戻しなさい。これは商品なんだから。お金と交換して始めて君のものだよ。」

説教しても馬の耳になんとかやらであることは承知していますが、

私はお菓子を陳列棚に戻すように闖入者を大声で説得しました。説得しているというより大声を出して威圧したというのが適切です。私は説得しながら真夜中の闖入者からお菓子を取ろうとしましたが、私がお菓子の袋に触れた瞬間に真夜中の闖入者は「うう、うう。」と言って後ずさりしました。真夜中の闖入者はお菓子だけは離そうとしません。私の苛立ちは頂点に達しました。私は真夜中の闖入者を殴っても強引に真夜中の闖入者が抱えているお菓子を奪い返そうとしました。

「お菓子をよこせ。よこすんだ。」

私は厳しい声で言いました。

「お菓子をよこさなかったらぶん殴るぞ。それでもいいのか。」

私は真夜中の闖入者を脅し、ちゃんちゃんこを掴みました。そしてお菓子を取ろうとしました。しかし、真夜中の闖入者は、「うう、うう。」と言いながらお菓子を離そうとはしませんでした。

「ほんとに殴るぞ。」

私が腕を振り上げた時にキーンコーンとチャイムが鳴りました。

変な若者が入ってきた。

若者二人がやって来た

「いらつしゃいませ。」

と反射的に私は言い、真夜中の闖入者を掴んだままドアの方を見ました。背の高いがっちりとした体格の若者が入って来ました。若者は丸刈りで赤のバスケットシャツを着けていました。彼の後ろから入って来たもう一人の若者は髪を金髪に染めています。

「明日、上間先輩に総合グラウンドに呼ばれているんだ。」

「ええ、そいつはヤバイぜ。うさぎ飛びでグラウンドを一周とかさ、ヒンズースクワット千回とかをさせられるらしいぜ。」

「マジでかー。ヤバイなあ。」

若者二人は話し合いながらソフトドリンクコーナーに行つてペットボトルのポカリスエット二本を取ると、ファーストフードコーナーに行つておにぎり二個を取りました。そして、レジの前に立ちました。私は真夜中の闖入者に、

「そこに立っている。動くなよ。」

と忠告してから手を離し、走つてレジカウンターに行きました。

「別々に計算しますか。まとめて計算しますか。」

私は二人別々の会計をするのかどうかを聞きました。

「まとめて計算して。」

がっちりした体格の若者がそう言いました。私はカウンターに置かれたポカリスエットとおにぎりのバーコードにスキャナーを当てました。

その時、真夜中の闖入者がお菓子を抱えてすたすたとドアに向かって歩いていくのを見えました。

「すみません。少し待ってください。」

と言って私はレジカウンターから急いで飛びだし外に出ようとしていた真夜中の闖入者を捕まえました。真夜中の闖入者は、
「うっ、うっ。」

とうめきながら抵抗しましたがすぐにおとなしくなりました。私は真夜中の闖入者を引つ張ってレジカウンターに戻ってきました。

「君たち、この子を知らないか。」

「おじさんの親戚かい。」

「とんでもない。突然店に入ってきてお菓子を盗ろうとしたんだ。どうだ、この子を見たことがないか。」

「知らないなあ。雄二、お前は知っているか。」

「見たことないなあ。おじさん。それよりレジの計算を早くやってくれよ。」

「済まないけど。この子を捕まえていてくれないか。そうじゃないとレジの計算ができないんだ。」

「放しゃあいいじゃん。こいつはおじさんと関係ねえんだろう。だつたらさつさと放してしまえばいいじゃん。」

「そういうわけにもいかないんだ。ほら見る。店のお菓子を抱えて離さないんだ。」

二人の若者は私の話を聞いて大笑いをしました。

「こいつ、食いしん坊なんだ。腹が減つたんでお菓子を取りに裸足で家を飛び出してきたんだ。」

「ああ、おまけにお金を持っていないんだ。」

「笑えるぜ。」

二人の若者はますます笑い転げました。

「お金を持たないで、裸足で、こんなに夜遅く、コンビニにお菓子を盗りにか。こいつアホだぜ。マジにアホだぜ。」

「この子、知的障害者みたいなんだ。」

私の言葉に二人の若者の笑いは止まりました。

「知的障害者というとあれのことか。そうか。」

二人は真夜中の闖入者をまじまじと見ました。

「お前、どこから来たんだ。お前の家はどこだ。オレ達か連れていつてやるうか。」

二人の若者が言い寄ると真夜中の闖入者は後ずさりをしました。真夜中の闖入者は二人の若者を恐がっているようです。

「お前なあ。黙っていると警察に連れていかれちゃうぞ。警察で拷問されちゃうぞ。」

金髪の若者が真夜中の闖入者の脇腹を指でつつきながら脅しました。

「この子は言葉がわからないみたいなんだ。」

「まさか。それじゃ、話ができないということか。」

「そうなんだ。」

「嘘だろう。」

二人の若者は真夜中の闖入者が言葉が理解できないことに驚きました。二人は真夜中の闖入者の顔を覗き込みました。

「あれ、こいつ子供ではないぞ。よく見てみる、雄二。」

「え、本当か。」

金髪の若者は真夜中の闖入者の顔を観察しました。

「清の言う通りだ。こいつは子供ではない。もしかするとオレ達より年を食っているかもしれない。言葉が分からないなんて信じられない。言葉が分からない振りをしているんじゃないのか。マジで話ができないなんて、清、お前は信じられるか。」

背の高い若者は首を横に振りました。

「知的障害とかなんとかいってもさ、オレたちと同じ人間じゃん。話ができないなんて考えられないよ。お前さあ、本当は話せるのに話せない振りをしているんじゃないのか。そうだったらよ。オレはマジで怒るぜえ。」

金髪の若者が真夜中の闖入者に言い寄りました。アルコールの臭いがプーンとしました。金髪の若者は酔っているようです。背の高い丸刈りの若者は酔っていないようです。

「この子を掴んでいてくれないか。レジ計算をするから。」

私は酔っていない背の高い丸刈りの若者に真夜中の闖入者を掴んで

くれるように頼みました。

「ああ、わかった。」

私はレジカウンターに行き、カウンターに置いてある千円札でレジ計算を済ますと二本のポカリスエットと二個のおにぎりをビニール袋に詰めました。

「お前は人間だろう。人間なら話ができなくては駄目なんだぞ。話ができなかったら人間失格なんだぞ。だから、言葉を勉強しろ。お父さんお母さんという言葉から勉強するんだ。どうだ。オレの言うことが分かるか。お前だって人間失格なんてものになりたくないだろう。おい、オレの言うことを真剣に聞いているか。ヤキを入れちゃうぞ。世の中は厳しいんだぞ。言葉がぺらぺら話せるオレでさえ仕事がなくて困っているんだ。いいか。お前なあ。親に甘やかされてんだろう。んで怠けているんだ。もっと厳しくされなくちゃあ。」

金髪の若者は延々と真夜中の闖入者に説教を続けていました。

「ありがとう。もういいから。」

私はビニール袋を渡しました。

「おじさん。こいつは甘えているんだよ。甘えているから言葉を覚えようとしなんだよ。頭の悪いオレでさえ日本語はぺらぺらなんだぜ。英語は全然駄目だけどよ。人間だったら誰でも話せるんだよ。話ができない人間なんていないよ。お前はヤキを入れなきゃな。ヤキを入れたら話ができるようになるかもしれないな。」

次第に調子に乗って真夜中の闖入者に詰め寄る金髪の若者の頭を、

「いい加減にしろ、雄二。」

と言って背の高い若者が叩きました。

「痛い。あ、ごめんなさい。オレ酔っています。おじさん、頑張ってください。それじゃあな。」

二人の若者は出て行きました。

真夜中の闖入者の性で私は商品を陳列棚に並べる仕事ができます。私は真夜中の闖入者を事務所の椅子に縛りつけようかどうか迷

いました。縛りつければ私は仕事ができます。しかし、もし、知的障害者を事務所の椅子に縛り付けたことが世間にはれてしまうと私は世間から責められるだろうし、深夜パートを解雇されるかもしれません。

誰にもばれないなら迷わずに真夜中の闖入者を椅子に縛りつけますが、椅子に縛られた真夜中の闖入者が唸り声を上げて唸り声が店内に漏れてお客の耳に聞こえてしまったら大変です。椅子に縛りつけたことが真夜中の闖入者の家族に知られたら知的障害者を虐待したとして裁判に訴えられて賠償金を取られるかもしれません。小心者の私は悪い結果を想像してしまい、真夜中の闖入者を事務所の椅子に縛りつけるのをためりました。

ミータンとムータンはかわゆい女の子

ミータンとムータンがやって来た

真夜中の闖入者を事務所の椅子に縛りつけるかどうか悩んでいる時に、キンコーンとチャイムが鳴りました。

「いらっしやいませ。」

ドアを見ると二人の若い女性が入って来ました。

「あたしさあ、もうやんなっちゃう。」

カツンカツ、カツカツカツンと不規則な四つの靴の音。スナックの仕事を終えたミータンとムータンです。

「ねえねえ、ミータンの爪見せて、うわーいいな。このネイルエナメルはどこで買ったの、教えて。」

ミータンはムータンの手を掴んで熱心にムータンの爪を見えています。ムータンはミータンに手を掴まれて不自由な歩きで時々転びそうになります。二人とも泥酔状態のようです。

「広の奴、今日もつけをしたんだよ。同級生だったからといってさ、許せるものじゃないよ。」

ムータンは不機嫌のようです。

「この色はグリーンなの、紫なの。いい色だなあ。ねえ、どこの店で買ったの、教えて。」

ミータンはムータンのネイルエナメルに興味深々でムータンの話を聞いていません。

「広がつけをしたために、今日もママに叱られたんだから。終いにはさママはなんと言ったと思う。広のつけはあたしが責任取れつてさ。ああ、もうやんなっちゃうよ。広の奴、近いうちにシメてやる。」

「だからさあ、ムータンのこのネイルエナメルはどこで買ったの。」

教えてよ。」

「ちよつとお、ミータンはあたしの話を聞いているの。」

「うん、聞いてる聞いているからさ、このネイルエナメルを売っている店の名前を教えて。」

ミータンとムータンは十八歳です。二人は近くのスナックで働いています。二人は幼友達で中学を卒業して直ぐにスナックの仕事をやるようになったようです。付けまつげに濃いアイライン、化粧を厚くしているので一見二十二、三才に見えます。

「おじさんおはよう。」

ムータンは私にいつもの挨拶をしました。ミータンもムータンに続いて、「おじさんおはよう。」

と言いました。私はふたりに、

「おはよう。」

と挨拶を返しました。

「おじさんの子供なの。」

ムータンは私の傍に立っている真夜中の闖入者に気づき、私に聞きました。

「いや、私の子供じゃない。二人はこの子の顔に見覚えはないかな。」

「あ、こいつ裸足だ。ファッショナブルだあ。」

ミータンは真夜中の闖入者が裸足であるのに気づいてはしやぎました。ミータンは、

「おじさんの子供は馬鹿だねえ。裸足でコンビニに来るなんて馬鹿だよ。うん馬鹿だよ。」

と言って笑いました。どうやら、ミータンはムータンの「おじさんの子供なの。」という質問を、「おじさんの子供。」と聞き違いしたようです。

「私の子供ではないよ。君たちはこの顔に見覚えないかな。」

「ムータンムータン、見て見て。この子裸足だよ。アハハハハ。この子はおかしいよ。おじさんの子供、絶対におかしい。アハハハハ。とーってもファッショナブル!。」

と笑いながらミータンは後ろに倒れそうになりました。カツンカツカツとミータンは後ずさりしました。

「二人ともこの子の顔をよく見てくれ。どうだ、見たことないか。最近じゃなくてもいい。昔でもいいからさ。」

ムータンは真夜中の闖入者の顔を凝視して、顔を横に振りしました。

「ムータンは見たことないなあ。ミータンはどう。この子を見たことがあるかなあ。」

ミータンはムータンに言われて真夜中の闖入者の顔を見ました。

「うっん、見たことがあるようなないような。なんか変な顔だなあ。あんたいくつなの。」

ミータンは真夜中の闖入者の顔を見ながら詰め寄りました。

「ねえ、いくつなのよ。」

真夜中の闖入者はミータンに詰め寄られて後ずさりしました。私や先程の若者が詰め寄ると、真夜中の闖入者は嫌がっているか恐がっているかどちらかの表情をしていましたが、ミータンやムータンに詰め寄られると気恥かしそうな表情になりました。真夜中の闖入者は男と女の判別はするようです。

「おじさん、この子はなんなの。」

「お金を持たずに買い物に来たんだよ。」

「お金を持たずに買い物に来たの。」

ムータンは「ふっん。」と言いながら真夜中の闖入者を顔から足まで観察を始めました。どうやらムータンは真夜中の闖入者が裸足であり、顔の表情もおかしいので真夜中の闖入者が普通の人間ではないことに気づいたようです。ところがミータンはまだ気づいていないようで、「お金を持たずに買い物に来たんだよ。」という私の話を真に受けて、

「ムータン、この子はあたしたちの中学生の時と同じことをやりに

来たんだ。こら少年。万引きは駄目ですよ。犯罪ですよ。刑務所に入れられるんですよ。直ぐに止めなさい。」

と、真夜中の闖入者を説教しました。

「君、名前はなんと言つの。住所はどこなの。お父さんの名前とお母さんの名前を言いなさい。君のお父さんとお母さんは万引きは悪いことだと教えなかったのか。万引きは立派な窃盗罪だからね。犯罪なんですよ。分かりますか。」

ミータンの口振りは警官が説教しているようです。ミータンは自分が中学生の時に万引きで捕まって警官に説教されたことをそのまま真夜中の闖入者に話しているのだろ。すらすらと言えるのは一度や二度ではなく何度も警察に捕まり、同じことを何度も聞かされる内にすらすると警官の口真似ができるようになったのだろ。ミータンとムータンは中学生の時、恐らく万引きの常習者だったのだろ。

「おじさん。この子はこれなの。」

と言って、ムータンは耳の傍で手てくるくるぱーをやりました。

「そうなんだ。お菓子を抱えて離さないんだ。無理に取ろうとしたら暴れるし困っているんだ。」

ムータンは真顔になりました。

「ミータン。この子は頭が変なんだってよ。」

「ミータンと同じくらい頭が変なの。」

「そういうことじゃないの。本当に頭が変だってことなの。おじさん、なんと言ったつけ、ほら、バカとかじゃなくて、脳膜炎、そう脳膜炎。いや、脳膜炎ではないな。ゲレンパーでもないし。なんと言ったつけな。最近は何の言葉だったな。なんて言ったかな、頭がパーな人間をちゃんとした言葉で。」

「知的障害者のことかい。」

「そうそう、その知的なとか。この子は知的なとかなの。」

「そうなんだ。話ができないし、お菓子は離さないし困っているよ。」

「わかった。あたしたちがお菓子を取ってあげる。万引きは悪いことだよ。子供を卒業して大人になって万引きは悪いことであることがムータンは分かってきた。万引きはやってはいけないことなのよねおじさん。」

ムータンは真夜中の闇入者が知的障害者であることをムータンに説明しましたが泥酔状態のムータンには理解できないようです。

酔いどれ女子対真夜中の闖入者

ともかくにもムータンとミータンの二人で真夜中の闖入者から真夜中の闖入者が抱えているお菓子を取り上げることになりました。

「いい子だから、おねえさんにお菓子を渡しなさい。さあ。」

とムータンが近寄ると真夜中の闖入者は恥かしそうな表情をし、もじもじしました。不思議なことにムータンとミータンには真夜中の闖入者は抵抗しようとしません。ひとつの袋は真夜中の闖入者の抵抗がなく難なく取れました。二つ目は少し抵抗しましたが取れました。しかし、最後の袋になると真夜中の闖入者は取られまいと強く抵抗をしました。

「こら少年、無駄な抵抗は止めなさい。」

ミータンが怒ってお菓子を無理やり取ろうとしたら、「うーうー。」と言いながらお菓子を強く抱えて後ずさりしました。

「聞き分けのない子だねえ。さっさと渡しなさい。」

ミータンが真夜中の闖入者に迫りました。

キンコーン

タバコを買いに客がひとり入ってきました。私は真夜中の闖入者をムータンとミータンに任せて、レジカウンターに戻りました。

真夜中の闖入者はミータンに肩を捕まれながらお菓子コーナーまで後ずさりしました。

「泥棒は駄目ですよ。さあ、ちゃんとここに戻して。君はおねえさんの言うことが聞けないの。言うことを聞かないならね、やーちゅーするよ。」

ミータンが怒り出しました。どうもミータンは短期な性格のようで

す。

「ミータン、怒ったら駄目だよ。この子は知的なんとかなんだからねえ、いい子だからそのお菓子をおねえさんに渡しなさい。」

ミータンとムータンが代わる代わる真夜中の闖入者のお菓子を取ろうとしましたが、お菓子を取ることはできませんでした。

「もう、あんたは根性が悪いわね。やーちゅーをしようね。ちよつと外に出ようか。」

やーちゅーとはお灸のことですが、ミータンのいうやーちゅーとはタバコの火を腕にくつつけることです。不良少女たちがやきを入れるのに利用する方法です。ミータンはやーちゅーをするために真夜中の闖入者をコンビニエンスの外に連れ出そうとしました。

「やーちゅーは駄目よ、ミータン。この子は知的なんとかだからやさしくしてあげないと。」

ムータンはミータンを引き止めました。

「反抗する子にはやーちゅーが一番よ。」

「やーちゅーは駄目だよ。」

「やーちゅーがいい。」

ムータンとミータンが揉めている時にムータンの携帯電話が鳴りました。

「もしもし、あ、広。お前さ。今日も内の店でつけをやったね。許せないよ。え、カラオケ行かないかって。お前、冗談は言うなよなカラオケ行く金があったらさあ、店のつけ払えよ。お前、同級生だからって甘えていないか。つけやるんだつら店に来るなよ。くそたつたれ広が。しつこいなあ。誰がお前とカラオケなんか行くか。お前ひとりで行けよ。じゃあな、電話切るよ。え、俊夫先輩も一緒だつて。嘘をかましているんじゃないだろうな。本当なら代わってみるよ。あ、俊夫先輩。」

ムータンの声が急に女らしい声に変わりました。

「はい、むつみです。今ですか。美千代と一緒にアパートの近くのコンビニに居ます。カラオケですか。だーい好きですよ。行きます

行きます。どこのカラオケ屋ですか。はい、分かります。美千代ですか。当然喜んで行きます。はいはい。今直ぐにいきます。」

ムータンは俊夫先輩が好きなようです。携帯電話をバッグに入れると、嬉々として、

「ムータン行くよ。」

と言ってムータンの手を引っ張りました。

「ちよつと待つて。こいつからお菓子を取り上げるからね。」

「もう、お菓子なんてどうでもいいの。早く行こう。」

「ええ、行くつてどこに行くのよ。」

「アカミチのカラオケ屋よ。」

「ちよつと待つてよ。ムータンはもう眠いし、ラーメン買ってお家に帰りたいよ。」

「駄目。カラオケに行くんだから。俊夫先輩が来るのよ。」

「ムータン行きたくない。」

ムータンは嫌がるムータンを無理矢理カラオケ屋に連れて行きました。

母親がやって来た

午前五時。ああ、大変だ。大急ぎで商品を棚に並べても勤務が終了する八時までには終わりそうにありません。五時を過ぎると客もちよくちよくやってきます。もうまごまごしていられません。しかし、真夜中の闖入者が居ては商品を棚に並べる仕事ができせん。切羽詰った私は真夜中の闖入者を事務所の椅子に縛る決心をしました。暴れるかもしれませんが、やってみるしかありません。もし大声を出したらガムテープで口を塞ぐ方法もあります。暴れたら椅子に縛ることを断念しなければならいかもしれませんが、とにかくやってみるしかありません。

私は真夜中の闖入者を連れて事務所に向かいました。

キンコーン。

チャイムが鳴りました。

まるで私がこれからやろうとしている残酷な行為への警告のようなタイミングのチャイムの音に私はどきっとしました。私は、「いらつしゃいませ。」と言うのを忘れて、ドアの方を見ました。

ドアには一人の女性が立ち、店内を見回しています。小柄で痩せた黒髪が長い女性です。陳列棚から顔を出している私と女性の目が合いました。

「あのう。」

と女性は言い、

「うちの謙語を見ませんでしたか。」

と言いました。そして、私の傍に立っている真夜中の闖入者を見つけると走って来ました。

「健吾。」

女性は真夜中の闖入者を名前で呼びました。ということは彼女は真夜中の闖入者の母親です。やっと母親が来ました。これで、真夜中の闖入者を事務所の椅子に縛り付けなくてもよくなりました。私は母親が来たのでほっとしました。

母親の頬はこけて目は落ち着きがありません。

「健吾、大丈夫だったかい。」

母親は真夜中の闖入者の肩を掴み、服の乱れを直し、どこか怪我をしていないか心配そうに真夜中の闖入者の頭から足の先まで点検を始めました。

「どこも怪我をしていないね。よかったわ。」

母親は息子が無事であることを確かめて、ひと安心しました。

私は母親が登場する直前に真夜中の闖入者を椅子に縛りつけようとしていました。私がやろうとしていたことを母親が分かるはずはありませんが、私は真夜中の闖入者を縛ろうとしていた後ろめたさが

あり、母親が真夜中の闖入者だけを見て私を無視しているのを幸いに私は黙ってその場を離れてレジカウンターに戻りました。

真夜中の闖入者暴れだす。

母親が来たから、真夜中の闖入者は母親に連れられてコンビニエンスから出ていくだろう。母子が店から出て行ったらすぐに商品を陳列棚に並べる作業を再開しようとは考えていました。息子の無事を確かめた母親はレジカウンターに来て、私に一言お礼を言っただから出て行くと私は予想し、母親と真夜中の闖入者がレジに来るのを待っていました。ところが真夜中の闖入者と母親に予期せぬ事態が起こりました。

真夜中の闖入者が暴れる

真夜中の闖入者はレジカウンターの方向とは逆の方向に歩き始めたのです。

「謙語ちゃん。」

と母親は引き止めようとしたが、真夜中の闖入者は手首を掴んでる母親の手を振り切り、「うう、うう。」と大声を出しながら、店内を歩き回りました。レジカウンターにいる私に聞こえるくらい大声を出しています。母親が来たのでおとなしくなると私は予想していましたが、私の予想に反して真夜中の闖入者は大声を出して歩き回っています。私は真夜中の闖入者が大声を出して歩き回っているのが理解できなくて呆然と眺めていました。

真夜中の闖入者は陳列棚の商品を取りました。母親に注意されるとその商品をぼとつと落としました。母親は真夜中の闖入者が落とした商品を拾いながら、

「店の商品を落としたら駄目ですよ。」

と真夜中の闖入者を注意しました。真夜中の闖入者は母親の注意を無視して別の陳列棚に行き、陳列棚の商品を掴みました。母親が近

づいてくると商品をぽとつと落として別の陳列棚に移動しました。母親は闖入者の落とした商品を拾って陳列棚に戻し、闖入者に追いつくと、

「謙語ちゃん、商品を取っちゃ駄目よ。」

とやさしく真夜中の闖入者をたしなめました。真夜中の闖入者は母親の声を聞くとますます狂暴化していきました。まるで反抗期の少年のようです。

真夜中の闖入者は唸りながら店内を歩き回り、立ち止まって陳列棚から商品を取ってはぽとつと落としそれから次の陳列棚に移動して商品を取ってはぽとつと落とすという行為を繰り返しました。

お菓子コーナーに來ると、真夜中の闖入者はお菓子を次々と抱え始めました。母親がいくらなだめても真夜中の闖入者はお菓子を取ることを止めません。抱えきれないお菓子の箱や袋は床にこぼれ落ちました。母親はこぼれ落ちたお菓子を陳列棚に戻しながら、真夜中の闖入者にお菓子を陳列棚に戻すように説得しました。しかし真夜中の闖入者はお菓子を取るのを止めようとしません。

「謙語ちゃん。お菓子を買ってあげるからね。ああ、このお菓子が食べたいの。じゃこれとこれは棚に戻しましょうね。こんなに沢山買ったら駄目ですよ。ね、これとこれとこれだけにしましょうね。」と母親は懸命に真夜中の闖入者がお菓子を取るのを止めようとしませんが、真夜中の闖入者は母親の言葉に耳を貸さずお菓子を取り続け、お菓子を抱えたまま店内を歩き回りました。

母親は真夜中の闖入者の腕を掴んで止めようとしたが、小柄な母親は止めることができません。母親は真夜中の闖入者に引きずられました。

真夜中の闖入者はお菓子は抱えたまま陳列棚のかんづめを取って抱えました。するとお菓子がこぼれ落ちました。ラーメンを取って抱えるとかんづめがこぼれ落ちました。パンを取ると別の商品がこぼれ落ちました。真夜中の闖入者は次々と商品を拾い次々と商品をこ

ぼす行為を繰り返しました。その度に母親はこぼれたお菓子やかんづめやラーメンやパンを拾い上げて陳列棚に戻しました。母親は陳列棚の商品を取らないように真夜中の闖入者をやさしく説得し続けました。

言葉が通じないということは母親がよく知っているはずなのに言葉の通じない真夜中の闖入者に母親は話し続けています。母親の愛の言葉は店内に悲しく響き渡りました。

「謙語ちゃん。このお菓子がほしいの、それじゃ、これとこれとこれは棚に戻しましょう。」

「謙語ちゃん。お願い。おかさんをお願いを聞いて。これとこれは謙語ちゃんには必要ないでしょう。これとこれは棚に戻しましょうね。」

「謙語ちゃん。いい子だから、そんなことをしないでね。」

母親はしきりに真夜中の闖入者に話し掛けて真夜中の闖入者の横暴を止めさせようとしています。しかし、母親の愛とやさしさの言葉はなんの効果もなく、真夜中の闖入者はますます横暴になっていきました。

愛する子に引きずられている痩せ細った母親の姿を見て、私は母親がかわいそうになってきました。母親は真夜中の闖入者が知的障害があると知った時から人一倍に愛情を注いできたろう。子供の時からずっと母親の愛情で真夜中の闖入者を包み込んできたらう。しかし、母親の愛情は真夜中の闖入者の心には沁みてはいないようです。

母親より大きい真夜中の闖入者は母親を引きずっています。母親の愛が無駄な愛のように私には思えました。引きずられながら、やさしい声で真夜中の闖入者をなだめている母親の姿はあわれでした。真夜中の闖入者と母親の関係はこれから五年十年と続いていくだろう。年々母親の体力は衰えていく一方です。母親はますます力が衰

えて息子に引きずられるだろう。我が子にどんどん引きずられていく白髪の老婆の姿が頭に浮かびました。哀れな情景です。母親はこれから死ぬまで、真夜中の闖入者に引きずられる人生を送っていくのだろうか。

店内を歩き回る真夜中の闖入者をか細い体で必死になって止めようとしながら引きずられている母親がかわいそうになり、母親の代わりに私が真夜中の闖入者の横暴を止める決心をしました。

母親が躓いて転びました。母親の手は真夜中の闖入者から離れました。

「謙吾ちゃん、待ちなさい。」

と真夜中の闖入者を呼びましたが、真夜中の闖入者は母親の声を無視して離れていきました。

真夜中の闖入者はおもちゃコーナーの前で止まり、おもちゃを取りました。私は真夜中の闖入者の側に行つて、

「これを取つたらだめです。」

威厳のある声で真夜中の闖入者に言いました。突然現れた私に驚いた真夜中の闖入者はおもちゃを放して私から逃げて、ラーメンコーナーの方に行きました。そして、ラーメンを取ろうとしました。私は真夜中の闖入者に駆け寄って、

「駄目と言つただろう。」

と厳しい声で言いました。ところが、今度は真夜中の闖入者は私の厳しい声にたじろぎません。私の注意を無視して真夜中の闖入者はラーメンを取りました。

私は真夜中の闖入者の顔を見て驚きました。闖入者の顔つきが変わっているのです。真夜中の闖入者の顔つきが堂々とした恐れのない顔つきになっていました。無表情だった顔が「意思」のある顔に変化しているのです。私はひるみました。真夜中の闖入者から強引にラーメンを取つたら真夜中の闖入者は私に飛び掛かるかもしれない

という恐怖があったからです。私は真夜中の闖入者からライメンを
取るのを躊躇しました。

母親は怖い

なぜ真夜中の闖入者は顔つきが変わったのだろうか。私は不思議でした。理由として考えられるのは母親の登場です。真夜中の闖入者は母親の言うことを気かないで、母親を引きずって歩き回っていました。母親に対してわがままに振舞った真夜中の闖入者は母親が登場したことで彼の気持ちが傲慢になったのではないだろうか。そうだ。母親への甘えが傲慢な態度を取るようになったのだ。そう考えると、「この甘ったれめが。」といい気持ちになり、私は真夜中の闖入者への怒りが湧き起こってきました。私は真夜中の闖入者の傲慢な気持ちをへし折ってやることにしました。

私はラーメンを掴んでいる闖入者の手首を掴みました。そして、

「ラーメンをここに置きなさい。」

ときつい声で言いました。真夜中の闖入者は私の命令を無視して、私の手をふりほどいてその場から去ろうとしました。しかし、私は手を離しません。

「ラーメンを元の場所に戻しなさい。」

私は強い調子で言いました。しかし、真夜中の闖入者は私の命令を無視しています。私は、私から離れようとしている真夜中の闖入者の手首を強く握り締めて腕をねじりました。闖入者は、

「ああ。」

と悲鳴を上げラーメンを離しました。私はラーメンを取り棚に戻しながら、手首をきつく握り締めたまま、

「これは売り物だから勝手に取ったら駄目だよ。」

と厳しい声で言いました。私は母親の代わりに真夜中の闖入者をつけたのです。

「いいね。店の商品は売り物だからね。自分が買う商品だけを取るのですよ。」

と、今度はやさしい声で言い、真夜中の闖入者の手首を掴んでいる手を離しました。すると真夜中の闖入者は私の傍から離れ、今度はお菓子コーナーに行きかっぱえびさんの袋を取ろうとしました。私は真夜中の闖入者の手首を掴みきつく締め上げました。闖入者は、「うっ、うっ。」と悲鳴を上げました。

「これは売り物と言っているだろう。勝手に取ったら駄目だよ。」私の厳しい声を避けるように闖入者は背を曲げて、

「うっ、うっ。」

と言いました。手を離したら闖入者は別の陳列棚に行き、新たな商品を取るだろう。

私は商品を取ったら痛い目に合うことを思い知らせるために、真夜中の闖入者の腕を強くねじりました。闖入者は、

「ああ。」

と悲鳴のような声を出しました。

母親が近づいてきました。私は掴んでいる真夜中の闖入者の手首を母親に握って

もらおうとしました。母親に一礼して、真夜中の闖入者の手首を母親の前に差し出しました。しかし、母親は真夜中の闖入者の手首を掴もうとしません。母親が真夜中の闖入者の手首を掴まないので私は戸惑いました。私は、

「あのう、これ。」

と言って、真夜中の闖入者の手首を母親に掴ませようとしたが、母親は私を睨んで、

「手を離してください。」

と言いました。私は真夜中の闖入者の横暴を止めたことで母親に感謝されると思っていました。ところが母親は私を憎むように睨んでいるのです。私は思ってもいなかった母親の態度に、

「え。」

と言ったきり体が硬直しました。

「手を離してと言っているでしょう。早く、手を離してください。」
母親は明らかに怒っていました。可愛い息子の手首を締めあげて悲鳴を上げさせた私を罵倒したい気持ちが顔にありありと出ています。私は母親の気迫に押されてうろたえました。

「し、しかし、手を離すとこの子はまた暴れますよ。」

と私は言いましたが、母親は、

「とにかく手を離してください。」

と私を睨みつけました。母親の表情は、

・ ・ ・ あなたに私のかわいい息子を痛めつける権利はありません。 ・

と言っているようです。私は仕方なく真夜中の闖入者の手を離しました。

母親は真夜中の闖入者の手首を揉みながら、

「痛くないかい、謙吾」

と、とてもやさしい声で言いました。

母親の態度を見て、真夜中の闖入者が強気の表情に変わっていた原因が分かりました。真夜中の闖入者にとって母親は我がままができるだけでなく、自分を迫害から守ってくれる存在でもあるのです。母親という強力な援軍が登場したので真夜中の闖入者は強気の表情に変わったのです。

真夜中の闖入者をやさしい愛で包んでいた母親は、一転して憎しみの顔に変わって私を睨みました。私を睨みながら、

「謙吾ちゃんはおっぱいさんが好物なんだよね。」

と言うと、おっぱいさんを棚から取って真夜中の闖入者に渡ししました。私が真夜中の闖入者を痛い目にあわせながらおっぱいせんを取り上げたことに対する怒りが込み上げているのだろう。母親にとって私は愛する息子を虐待した非道な人間なのでしょう。私は母親の鋭い視線にうろたえ、母親から目を反らして、逃げるようにレ

ジカウンターに戻りました。

母親は真夜中の闖入者を連れてレジにやってきます。真夜中の闖入者は私に痛めつけられた性なのか元気がなく、母親に素直について来ます。母親は私を睨みながら、真夜中の闖入者が抱えているお菓子をカウンターに置いて、

「いくらになりますか。」

と言いました。母親の私への怒りはまだ収まっていないようです。

私はみつつのお菓子のバーコードにスキャナーを当てました。ビッビッビと電子音がして、レジのモニターにみつつのお菓子の名前と値段が表示され、下の方に合計の請求額が表示されました。

「な、七百六十円です。」

母親に睨まれて私は緊張し、どもってしまいました。母親はバッグからサイフを出し、千円札を出しました。

「に、二百四十円のお、おつりです。」

私はつり銭を渡してから、ビニール袋にお菓子を入れて母親に渡しました。母親はふんだくるように私からビニール袋を取ると、

「謙吾ちゃん行きましょう。」

と言って、母親はおとなしくなった真夜中の闖入者の手を引いてコンビニエンスを出て行きました。

今も、真夜中の闖入者は深夜にたまにやって来ます。私は、「あ、またやってきたか。」とつぶやき、警察に電話します。しばらくするとパトカーがやってきて真夜中の闖入者を連れて行きます。

真夜中の闖入者が登場した最初の夜もパトカーを呼べばあんなに苦勞することはありませんでした。

朝のパートのマリエさんに真夜中の闖入者がコンビニエンスにやってきて大変だったことを話したら、「パトカーを呼べばよかったのに。」と軽く言われてしまいました。マリエさんに指摘されてはじめて警察を呼べば真夜中の闖入者の問題は簡単に解決することに気づきました。私は機転のきかない初老の男です。

私は今夜もゾンビニエンスの深夜パートをやっています。
暇でしたら、ぜひ一度は寄ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2400g/>

真夜中の闖入者

2010年10月28日06時28分発行